

吉見海軍少將の生涯

土屋 博

吉見信一は一八九四年廣島縣江田島に生まる。父は海軍兵學校教官の吉見乾海、長岡藩醫の家系にて、のちに海軍中將、海城中學校長を務むることとなる人物なり。

信一は廣島中學を卒業し、一九一二年岡山醫學專門學校に合格するも、海軍兵學校に合格し、一九一五年に卒業す。専門は砲術、海兵四十三期。同期に中澤佑中將あり。

一九四三年、ミクロネシア東端のウオツゼ島の、第六十四警備隊司令に任命せらる。時に四十九歳、大佐。兵員は三千五百名程度なりき。

一九四五年、補給を斷たれ一年餘、ウオツゼの飢餓愈々進み、ゴキブリを口に入るる兵士、上官の命令に背く兵士もあらはる。

終戦時には兵員は千五百名にまで減少す。八月三十日、米國巡洋艦バロン號到着し日本軍の武装解除行はる。十一月十一日、日本海軍のうち一隻のみ残りたる航空母艦鳳翔にて、十一月十一日浦賀に無事歸還す。

かつて聯合艦隊司令部の置かれし處は日吉の慶應義塾大學、その醫學部を受験し合格す。

アルバイトは占領軍社交クラブとなる如水會館にての英語通譯。三鷹の假學舎にて二年間の基礎學科を終へ、信濃町の醫學部に移り卒業す。インターン生活を経て、一九五二年、信一五十八歳、田園調布一丁目に吉見小兒科医院を開業す。その後、船醫として世界を廻り、また老人病院にも勤務す。

一九八八年五月、九十四歳を五日後に控へ信一永眠。

或る葬儀參列者の手紙に曰く、「昭和二十九年早春生れて一か月の長男を往診下さり、僅かなる金額を受け取るのみ。此のたびは新聞記事（天声人語）にて先生の生涯を拜讀し、生くるとは如何なることか、改めて教へて頂きたる心地す。吉見先生、本當に有難う」と。

吉見信一は、家内の祖父（母の父）なり。

（平成三十年十一月十四日受附）

